

わ

が

街

わ

が

故

郷

株式会社富士製作所と伊賀市

当社の歩み——ライターからベアリングへ

当社は1939（昭和14）年、大阪市住吉区で村上製作所として創業し、ライターの製造を開始しました。1949年には同市東成区へ移転、主として魔法瓶の製造を始めましたが、その1年後にはベアリング用保持器ならびにシールの製造に着手し、ベアリングに関する事業へ方向を転換しました。1956（昭和31）年には資本金80万円で株式会社富士製作所を設立し、コンベヤ用プレスベアリングの本格的な製造・販売に乗り出すことを目的に、また当時の上野市長様のご進言もあり、1963（昭和38）年、三重県上野市（現在の伊賀市）に敷地面積4,500m²の新工場を建設しました。



富士製作所上野工場正門から工場を望む

1970（昭和45）年には、ドイツのインターロール社（現スイス本社）との販売契約および技術提携を実現、コンベヤコンポーネントの販売を

スタートさせ、プレスベアリングとの2本柱で経営のグローバル化を成し遂げました。その後も多様化するニーズに対応するため、1990年にはISO 9001とISO 14001の認証を取得。さらに製造と販売が一体となったシステムとルールづくりで、無駄を徹底的に排除する“製販同期化経営”を確立。自社開発のLCA（ローコストオートメーション）マシンの導入によって、製品精度を左右する金型加工と外輪・内輪加工から組立、検査、出荷まで一貫した生産体制を構築するに至りました。

伊賀市の発展——観光と産業

伊賀市は2004（平成16）年11月、旧上野市をはじめとした6市町村が合併して発足した新しい自治体です。現在の人口は10万2000人あまり。三重県の北西部、四方を山に囲まれた伊賀盆地に位置し、北は滋賀県、西は京都府と奈良県に接しています。古代から近世まで伊賀の国と呼ばれた地域で、旧上野市の高台には江戸時代の城址があります。ここに1935（昭和10）年、3層の天守閣が新しく築造されて、市民や観光客から伊賀上野城として親しまれ、城下町のたたずまいを色濃く残す伊賀上野のシンボルの地位を占めています。

伊賀の地で幼少期を過ごした小説家の横光利

一（1898～1947）は「わが郷土讃」という隨筆で、志賀の都（古代の大津の宮）、奈良、京都、伊勢神宮の4地点の中央にあたるのが伊賀であり、都で敗北した者が隠れた場所であるとともに、都の文化がひそかに伝えられた土地でもあると紹介しています。たしかに古来、伊賀は都に近く、京・大坂と伊勢・津を結ぶ交通上の要地に位置していて、さまざまな情報が通過する土地でもありました。現代の伊賀市もまた、近畿圏と中部圏の中間という良好な立地にあって、産業面において双方の活力を受け入れながら力強い発展を続けています。



伊賀上野城

忍者の故郷——ハットリくんは伊賀忍者

古い歴史と伝統を誇る伊賀市ですが、伊賀といえば多くの人が思い浮かべるのは忍者でしょう。戦乱の世に、諸大名が情報収集や奇襲、暗殺などのプロフェッショナルとして雇ったのが忍者です。伊賀にも高度な忍びの技能を身につけた地侍の集団がありました。のちに講談や小説、テレビドラマなどフィクションの世界で忍者が人気を集めることになりますが、さまざまな流派のなかでもっとも有名なのが伊賀忍法で、藤子不二雄Ⓐの漫画でおなじみの忍者ハットリくんも、実在した伊賀忍者、服部半蔵の血を引く少年忍者です。

伊賀忍者の本拠地とあって、伊賀市では忍者をテーマにした施設が人気を集めています。伊

賀上野城を含む上野公園の中には、伊賀流忍者博物館があります。古い土豪の屋敷を移築したもので、ごく普通の農家にしか見えませんが、屋敷内にはさまざまな仕掛けが施され、忍び装束に身を包んだ女忍者“くの一”が、忍者屋敷独特の仕掛けを案内してくれます。忍者に関する資料の展示も充実しており、今年2月には博物館法にもとづく登録博物館に認定されました。忍者や忍術をテーマにした登録博物館は、全国でこれが最初のものだといいます。



伊賀流忍者博物館

毎年4月から5月にかけての観光シーズンには、忍者をテーマにしたイベント「伊賀上野NINJAフェスタ」が催され、伊賀上野のまちは全国から訪れた観光客で賑わいます。忍者装束のレンタルもあれば、手裏剣などが楽しめる忍者道場もあって、さまざまな伊賀流のもてなしが繰り広げられます。また最近では、時代の波に乗ってインターネットにも伊賀忍者が進出。伊賀上野観光協会がセカンドライフという仮想空間に「伊賀忍者の里」を開設し、国境のないインターネットの世界で、誰でも自由に伊賀の忍者に会うことができるようになりました。

芭蕉のふるさと——俳聖の遺徳と偉業

忍者と並んで伊賀を象徴するのは、俳聖と呼ばれた俳人、松尾芭蕉です。江戸時代前期の1644（寛永21）年、伊賀の国に生まれ、俳諧の道を

志して、江戸で蕉風と呼ばれる芸術性の高い俳句の世界を確立。1694(元禄7)年、「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の句を残し、大坂で没しました。門人とともに江戸深川から奥州・北陸の名所や旧跡を巡り、大垣に至るまでの紀行文「奥の細道」は、日本を代表する文芸作品のひとつであり、日本人にとって旅とは何か、その本質を教えてくれる国民の共有財産でもあります。

芭蕉の生まれ故郷だけに、伊賀には芭蕉ゆかりのスポットがたくさん存在しています。上野公園内の芭翁記念館は、1959(昭和34)年にオープンし、芭蕉直筆の資料をはじめ、俳諧などに関する貴重な資料を収集。企画展には全国から熱心な芭蕉ファンが訪れます。おなじく公園内にある俳聖殿は、芭蕉生誕300年を記念して1942(昭和17)年に建設されました。芭蕉の旅姿をデザインしたという外観がユニークです。毎年秋の芭蕉の命日には、この俳聖殿で芭蕉祭が催され、市民が偉大な先人の遺徳をしのんでいます。



俳聖殿

伊賀上野のまちに出てみると、赤坂町には芭翁の生家が残っています。芭翁が処女句集「貝おほひ」を執筆したとされる釣月軒も、おなじく赤坂町にあります。東町にはその「貝おほひ」を奉納したとされる上野天神宮が鎮座しており、西日南町に足を運ぶと、芭翁ゆかりの庵のうち唯一現存する蓑虫庵。農人町にある松尾家の菩

提寺愛染院（遍光山願成寺）には、芭翁の遺髪を納めた故郷塚が建てられていて、こうしたゆかりの地を散策するだけで、芭翁の偉業が身近に感じられます。

伊賀市とともに——おののおのの花の手柄を

伊賀市内には多くの芭翁句碑が建てられ、芭翁に寄せる市民の敬愛を示しています。上野東日南町にある市立上野図書館の句碑には「草いろいいろおののおのの花の手柄かな」という句が彫られ、「Many kinds of plants and each one triumphant in its special blossom」との英訳が添えられています。あまりなじみのない作品ですが、1983(昭和58)年に来日したアメリカのロナルド・レーガン大統領が、国会で行った演説にこの句を引用したこと、一躍話題となりました。

日本に発した俳句が“HAIKU”として国際的に親しまれていることを、日本人が海外から教えられたというわけですが、この句が示しているのは、人気グループSMAPのヒット曲「世界に一つだけの花」を連想させるような世界観です。人も、地域も、あるいは国家も、それぞれがかけがえのない存在として、おののおのの花を咲かせ、誇り合うという21世紀にこそふさわしい世界観を、17世紀の人であった芭翁がいちはやく発信していたのだといえるかもしれません。



俳聖松尾芭翁像

縁あって伊賀市に新工場を建設して以来、当社も現在では、マテハン技術一筋60余年の蓄積を活かし、プレスベアリングやコンベヤローラなどの開発をはじめとして、自社ノウハウから生み出される多彩な製品づくりを展開しています。当社もまた多様な“花”のひとつとして、独自の“手柄”を世界に誇ることができるよう、これからも伊賀市の発展に歩調を合わせ、生産・流通の世界に新しいイノヴェーションを吹き込みながら、地球環境と地域社会に貢献できる真の国際標準企業を目指したいと念願しています。

（株式会社 富士製作所
代表取締役社長 村上 昌弘）